

スクエア SQUARE

特集

自分らしく生きるためのヒント ～女性の先駆者たちに学ぶ～



柳瀬川

アイレックだより

2013(第18回)アイレックまつり

講演

だれもが幸せに長生きするために

しゃべり場

地域のみんなで子育てを楽しもう!

映画・音楽

午後の遺言状・昼下がりの音楽会

シンポジウム

麦畑をかけぬけて

展示・バザー

清瀬市男女平等推進条例

Information

アイレックからのお知らせ

・人権週間記念事業

・2014(第19回)アイレックまつり実行委員募集

清瀬市男女共同参画センター (アイレック)

2013.12

79



黒田千力 (くろだちか)
1884—1968
化学者 女性初の理学士

佐賀県生まれ。父は進歩的な考えの持ち主で、これからは学問が必要と、7人の子どものほとんどに大学教育を受けさせた。女子教育の重視されない時代に、すぐ上の姉も東京の日本女子大学に学ばせた。1906(明治39)年、東京女子師範学校(現・お茶

の水女子大学)を卒業。その後研究所に進み母校の助教になった。

1913(大正2)年、東北帝国大学(現・東北大学)が、わが国で初めて女性に門戸を開放した時入学した3名のうちのひとり。有機化学を専攻し1916年卒業。日本で最初の女性の理学士になった。1918年、母校の教授として迎えられた。この年、東北

帝大で研究した「紫根の色素シコニンについて」の成果を東京科学会誌に発表。1921年より2年間オックスフォード大学に留学し、パーキン教授の指導を受けて研究。帰国後、母校で教職に戻るとともに、理化学研究所で紅花の色素カーサミンの研究に没頭して、化

学構造式を決定。その成果の論文によって45歳で東北帝大から理学博士の学位を受ける。その後ももっぱら天然色素の研究を続け、1936年、日本化学会第1回真島賞を受けた。その後、還暦を過ぎて取り組んだ玉ねぎの皮に含まれる血圧降下成分(ケルセチン)を市販薬につなげるなど84年の生涯を化学にささげた。

「新聞は日本ではじめての女大学生を冷やかし半分を書く、街へ出ると人々の視線を浴びるといふ、今から思えばなかなか女性の立場の認められていない時代でしたが私どもは意気込みに溢れていました」。黒田千力、随筆の一文である。当時の女性科学者は「生涯独身」が不文律であった。

2012年現在、約90万人いる研究者に占める女性の割合は14%(内閣府男女共同参画局)。主要国で最低レベルです。さらに分野別では、工学9%

理学13%と、理工系が少ないのが現状です。研究を主導する准教授、教授職はさらに減り、理・工・農の女性教授は極端に少なく、いずれも5%未満です(文部科学省「学校基本調査」2012年)。

理工系64学会を対象としたアンケートでは少ない理由について、女性の回答が多い順に①家庭と仕事の両立が困難

②育児後の復帰が困難③業績評価にこうした点が考慮されない④評価者に男性を優先する意識がある(「科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査」男女共同参画学協会連絡会2008年)でした。こうした傾向は他の職業の女性にも当てはまる共通の問題ではないでしょうか。

理系に苦手意識をもつ女性は多いようです。しかし身近な自然への興味をもったり、地道な研究をすることが、女性に向かないと言えるでしょうか。研究は「男性優位」のようですが、『なぜ理系に進む女性は少ないのか』では、男女ともに「無意識のバイアス(男女の役割の固定観念)」があると複数の執筆者が報告しています。興味や関心、才能がある女性が、もっと研究の分野に進めるような社会を作っていきたくですね。(堀)

*参考文献

『なぜ理系に進む女性は少ないのか?』ステイブン・J・セシ/編 ウェンディ・M・ウィリアムス/編 大隅典子/訳 西村書店

前田侯子、1986、「黒田千力先生の生涯と研究」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第7号・77・96。

黒田千力、1957、「化学の道に生きて」『婦人の友』3月号・28・33。(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編・刊2000)『黒田千力資料目録』72・77。所収

*写真・東北大学史料館提供

ためのヒント に学ぶ~



活躍の場が制限されていた時代に「女のくせに」とい

拓いた先駆者たちを紹介しつづけます。彼女たちは男性たち一般的には広く知られているとはいえないようです。位は非常に低く、役割は適齢期になれば嫁に行き、跡性に従って生きることは、当然のことでした。そうし縛られず生きた、彼女たちの行動や生涯を知ることにつけさせたらと思います。

くの困難がありました。

由に生き、活躍できているのでしょうか。いまだに女性

監修：鈴木裕子 財団法人東京女性財団を参考にしました



特集

自分らしく生きる ～女性の先駆者たち

今回の特集では、女性の権利がほとんど認められず、う社会の偏見を打ち破り、さまざまな分野で道を切り口に勝るとも劣らない業績を残したにもかかわらず、一先駆者たちが生きた「家制度」の時代、女性の地継ぎの男子を産むこと。女性が一生を、家族の中の男た中で、女性として幾多の苦難を乗り越え既成概念によって、私たちも自分らしく生きるためのヒントを見かつて、女性が自立をめざして立ち上がるには、多取り巻く状況が全く違うはずの現代、女性たちは自の能力や役割に対する固定的な見方が根強く残っている予想がつきにくい。だからこそ、一人ひとりの生残る課題についても考えてみました。

(なお、全般にわたり『先駆者たちの肖像 明日を拓いた女性たち』

いまなお新しい女性解放理論



山川 菊栄 (やまかわ きくえ)
1890—1980
女性運動家 労働省婦人少年局初代局長

師範学校(現・お茶の水女子大学)第1回卒業生。厳しかったが、子どもは男女平等に扱った。賢母良妻を説く教師より母の言うことを信じ、社会批判の目を養い、職業を持って独立しようという意思が確立したという。

1912(大正元)年、女子英学塾(現・津田塾大学)卒業後、伊藤野枝の廃娼運動批判を批評した論文で論壇に登場。1916年、社会主義者山川均と結婚。母性保護論争では、与謝野晶子の経済的独立論と平塚らいてうの母性保護論を、ともに批判するとともに、労働と母性の両立を展望する社会

合評議会の婦人部テーゼを起草し、婦

人部設置を提唱するなど、女性労働運動に力を尽くした。大正時代すでに菊栄は、男女の性役割による差別、家長的家族の弊害、職業労働と家事労働の矛盾、女性の低賃金、家事の社会化、保育所の設置などを提起。これらは、今に通じる先駆的なものであり、今日なお、女性の自立にとつての課題となっている。女性論など多くの書物の翻訳・紹介も行った。

戦後、労働省が発足。初の女性の局長職として、婦人少年局初代局長に就任。これまでの思想の実践をはじめた。

各都道府県に出先機関として婦人少年室を置き、その室長は全員女性にすると言明。女性に責任ある任務は務まらない等の、男性幹部の抵抗を押し切り実行した。女性の生活や労働の実態を調査し報告書にまとめるとともに、菊栄自らも全国に足を運び、働く女性の生の声を聞き、女性労働者の地位向上、改善のための政策遂行に役立った。さらに、ポスター、紙芝居など工夫を凝らした啓発活動を展開した。

退任後は国内・外の女性労働事情の調査、講演、執筆活動の傍ら月刊誌『婦人のこえ』の発行、婦人問題懇話会の設立など、女性が社会を変える主体となるための学び合う場を作り、女性の育成に力を注ぎ、様々な分野で活動す

多くの女性が育った。菊栄が目指した男女平等への道は、その後どうでしょうか。

女性の就業継続や再就職を巡る状況は依然厳しく、育児休業を取得している女性は増えていますが、出産前後に継続就業している割合は増えず、第1子出産を機に、約6割の女性が離職しています(内閣府・男女共同参画推進連携会議)。また、企業等における役員や管理職に占める女性割合は、低い水準のままです。

男女がともに仕事と家事・育児・介護等を両立できるよう、ワーク・ライフバランス(仕事と生活の調和)の推進が急務ではないでしょうか。(黒澤)

*参考文献

DVD
「姉妹よ、まずかく疑うことを習え」
企画・監修：山川菊栄記念会
監督：山上千恵子/76分/2011年
連絡先：山川菊栄記念会
<http://www.yamakawakikue.com/>



『二十世紀をあゆむある女の足あと』

山川菊栄著 大和書房

『山川菊栄の現代的意義 いま女性が働くこととフェミニズム』

山川菊栄記念会編 労働者運動資料室
*写真・山川菊栄記念会提供

日常を生きる女性を美しく描いた画家



上村 松園 (うえむら しょうえん)
1875—1949
日本画家

京都府生まれ。本名津禰(つね)。父は誕生前に他界。葉茶屋を営む母に育てられた。幼い時から何より絵が好きで、小学校卒業後京都府画学校(現・京都市立芸術大学)、および鈴木松年の画塾に進み、本格的に日本画の勉強を始める。強硬に反対する親戚もいるなか「つうさんの好きな道やもん」と、母は庇って引かなかつたという。

当時、女性の生き方はほとんどの場合、花嫁修業をし、嫁に行き子を産んで母になり、家長である男性に従うことであり、それが当然とされていた。髪を結う時間も惜しんで熱心に学び、1890(明治23)年、15歳の時に第3回国勧業博覧会に出品した「四季美人図」を、英国の王族が買い上げたことから、松園の名は評判になる。以来、人物画一筋に打ち込み、25歳で「花ざかり」が日本絵画協会主催の展覧会で

銀杯授章するなど、当時の主要な美術展に意欲的に出品、常に賞を取り、若手の注目画家のひとりになった。

27歳で長男信太郎(日本画家 上村松園) 出産。未婚の母となり、周囲から中傷を受けるが、母の支えにより絵の勉強に精進。画家として独り立ちを果たすが、一方で厳しい批評にさらされることも多くなつた。その名声を妬むものによる嫌がらせなども起こり、展覧会への出品作に落書きをされるといふ事件も起きている。

「私はたいがい女性の絵ばかりを描いている。しかし、女性は美しければよい、という気持ちで描いたことは一度もない」と松園はいふ。代表作『序の舞』にあるように、単に美しいだけではなく、凛とした心を持った女性の姿を、繊細に鮮明な色調で格調高く描き続けた。

日本の美人画の歴史に残る数々の傑作を送り出し、40歳以降、文展永久無鑑査、帝展審査委員、芸術院会員となるなど、女性の画家として第一人者の地位を守り続け、1948(昭和23)年73歳で女性初の文化勲章を受賞。

「女」と言うだけで受けた中傷は数知れず、成功の影にはさまざま偏見や試練があり、「周りは敵ばかりやった」と語っているほどである。

晩年。終生松園を支え続けた母に代表される、働き生活をする女性を描き美人画の中に取り入れた。松園にとつて母の存在がいかに大きかつたかが伺える。絵筆をもっているときが一番楽しく、尊く、心丈夫だと絵画一筋に打ち込み、74歳の生涯を閉じた。

松園が生きた時代とは異なり、現在、多くの美術学校に入学する半数以上が女性です。しかし、プロとして活躍する女性の画家は少なく、知名度も低いように思います。結婚、出産により画家を断念しているケースも多いようです。

松園の場合、母の絶対的な支えがありました。それは現在においても稀なケースだと思ひます。

もし「母の支え」が「社会全体の支え」だったら。力強く支える体制が整っているなら、女性は生き方や夢を諦めることなく進んでいけるのではないのでしょうか。私たち自身の意識にも「女性だから」という根強い壁があるように思ひます。このことも合わせ改めて考えたいものです。(河原)

*参考文献

『もつと知りたい上村松園生涯と作品』

加藤類子著 東京美術

『女性画家列伝』若桑みどり著 岩波書店

『近代日本女性史6美術』

佐藤瀧子著 鹿島研究所出版社

*写真・松伯美術館提供

ご存知ですか

憲法24条草案の執筆者

ベアテ・シロタ・ゴードンさん

日本の女性に、
幸せになってほしかった

「家庭生活における個人の尊厳と両性の平等」について書かれた、日本国憲法第24条。戦前の日本の女性には、社会的な役割は全くありませんでした。離婚もできず、好きな人と自由に結婚することもできない。財産権も持たず、また相続を受けることもできなかったのです。

第二次世界大戦終結後、新しい憲法の草案がつくられました。当時GHQの職員だったベアテ・シロタ・ゴードンさんは、日本国憲法の制定に関わった唯の女性。第24条の草案を執筆し、敗戦後の日本で、女性の権利を獲得するために力を注ぎました。

ベアテさんは東京・乃木坂育ち。5歳からの10年間を、家族と日本で過ごしました。そのため、戦前の日本の女性が何の権利も持っていないかつたことを、よく見て知っていました。日本の女性はいかにかわいそうだと、子ども心にも思っていたそうです。

憲法草案作成チームに抜擢されたときは「この仕事に運命的なものを感じ、熱い使命感を抱いた」と、ベ